東大新書47

日本の水資源

高橋　裕著　東京大学出版会刊

水—われわれの生活と密接なつながりをもつ「水」—それは洪水となってわれわれの生活を破壊し，用水となってわれわれの生活を発展させた。人間社会に占める水の重要な役割は有史以来認識せられてきたが，今日の日本ほど水問題が政治的，社会的な関心の対象となってきた時点はない。水害，水不足，地盤沈下，水質汚濁，ダムにまつわる数々の問題……水に連なる直接的，間接的な話題が日々の新聞を賑わし，広く一般市井の関心を集めている。とりわけ，近年における工業用水の急激な需用増大は水の需給関係を一変し，豊富な水資源に恵まれた（といいならされてきた）わが国の水問題を大きな転換期に直面せしめるに至っている。かかる時点において，わが国における水問題の実態を解説し，水資源計画に対する方向を明示した本書刊行の意義は大きい。

「日本の水資源」の大テーマをかかげ，これだけの小冊子にこれほどの充実した解説を盛り込み，著者の蘊蓄卓論を駆使した著作はかって見当らない。著者が，わが国における水資源問題の泰斗　安芸皎一博士の薫陶の下に長年培われた水資源観をここに結実させたと見れば，その好著のゆえんが理解される。

ハンディーなポケット版，流暢な文脈，明快な論旨，あまたの引例，筆者は本書を入手して夜半一気に読了し，かくもたやすく水資源論の知識を吸収し得たことに，近頃まれなみち足りた読後感を味わった。されば本書が一人でも多くの人々の座右に上り，水問題の知識が日本人の心の中に培われ，日本の水資源開発の転換のときに当って，“水の恵みにすっかり慣れきった習慣やものの考え方から脱却し，今日の水問題をもたらした背景を技術史的，産業論的立場から捕え”，その解決の方向に国民全体が協力する気運の醸成されることがのぞまれる。

ここに感銘深い本書の結語を引用し，著者の理想が結実せんことを祈る。

〝災害というものを広く考え，つまり水質汚濁も水不足も含めるとして，防災の意義を深く掘り下げて考えてみると，それが長い目で見た場合，一国の文明盛衰に連なることが把握できよう。この考えを進めてくれば，防災を軽視するような開発が，果して誰のためのものか。少なくとも私たちの子孫のためのものでないことがはっきりしてくる。

こうして水資源論は文明論に連なる。そのような認識に立って，私たちは子孫のために，国家百年の計に立った水資源開発計画を立てよう。国土への私たちの働きかけが，将来の国土の姿を決定する。だから国土が興るか亡ぶか，それは働きかける民族の責任である。一度少しでも狂い始めた自然のリズムは，そして一旦傾きかけた文明の陽は，容易なことではもどらない。歴史は厳然とそれを教えている〟。

本書の内容

はじめに——水資源序説——：わが国の降水量，河川流量の特性を説明

Ⅰ　水との闘い：まず洪水対策工事の概要を解説，ついで，水を治めた人びとと題して，わが国における利水治水の歴史を古代から現代までにわたって回顧。さらに洪水との闘い，津波と防災，の各節で，河川工学，海岸工学の意義，その歴史的展開過程と対策上の問題点を論述。

Ⅱ　水の利用：まず日本の水利用の実態を白書，調書にもとづいて概観し，その転換期に立つゆえんを述べ，ついで水利用の各部門ごとに問題点を探る。各論は，水と農業，水とエネルギー，工業と水，都市と水。

Ⅲ　水をつくる：水不足に対処する新技術の動向として，人工降雨，海水の淡水化，蒸発の抑制，地下水涵養の各項について解説。

むすび：水資源の現代的課題を示し，21世紀をめざす水資源計画の立案を説く。

巻末に文献解説として，水問題に関する和書の紹介が行なわれており，一歩進んだ研究をのぞむ読者にとって大へん便利な資料となっている。

著　者：正員　東京大学助教授　工学部土木工学科

体　裁：新書判　205ページ　定価240円　1963. 4. 30刊

東大出版会：東京都文京区本富士町1　振替東京59964番

電話（811）8814

【電力中央研究所　千秋信一・記】